

世界人口は今世紀中頃から減少する？

藤平 和俊

過去数十年の間、多くの科学者や政治家は、世界人口の急増が地球上の資源を枯渇させるだろうと警告してきた。ところが、近年、これと異なる警鐘を鳴らす人口統計の専門家が増えている。*Empty Planet: The Shock of Global Population Decline*（邦題『2050年 世界人口大減少』）の著者（Darrell Bricker, John Ibbitson）はそのような専門家の先駆者である。彼らは、今世紀中頃から世界人口は減少に向かうと論ずる。

国連人口部の『世界人口予測 2015』は、21世紀末に世界人口は110億人に達し、人口の安定化は2100年以降になるとした（図1の「中位推計」）。一方、*Empty Planet*の著者は、国連の予測値は高すぎると断じた。彼らは、世界人口は2040～2060年にピークに達し、その後は減少に転じると予測した。*Empty Planet*に図表はないが、本文中で著者は2つの推定値を提示した。2050年に90億人、2100年に77億人である。これら2点を通る線は、図1中の「低位推計」に接近する。

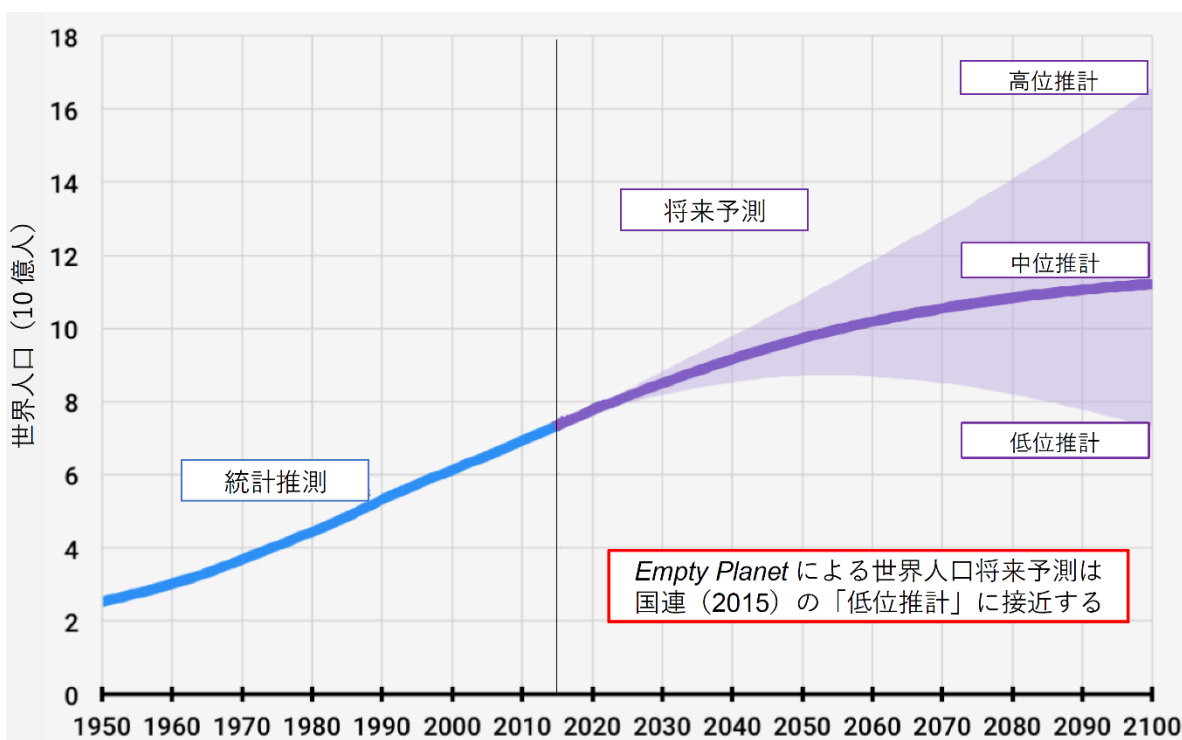


図1. 国連の人口推計（2015年）

出所：United Nations “World Population Prospects 2015”

藤平和俊. 世界人口は今世紀中頃から減少する？ 環境学研究所. 2025年4月

<https://www.kankyogaku.com/docs/population-decline-japanese.pdf>

環境学研究所ホームページ：<https://www.kankyogaku.com/>

『2050年 世界人口大減少』

人口減少が始まっている国の数は、世界ですでに 20 を超えている。韓国や日本、スペインやイタリア、多くの東欧諸国では、毎年、人口を減らしている。しかし、高所得国の人口減少は目新しい話ではない。

大きなニュースは、巨大な発展途上国で出生率が下がって人口が減少へと向かうことである。中国はすでに 2020 年代初頭から人口を減らしている。今世紀中頃までにはブラジルとインドネシアも続く。インドでさえ、今後 25 年程度で人口は安定化してその後は減少へと転じる。著者は、さらにアフリカでも、国連予測よりもかなり早く高出生率は終わると予測する。

研究方法

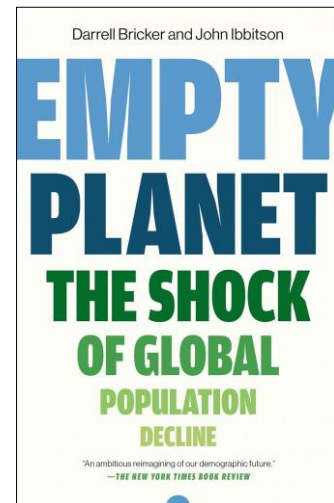
Empty Planet (2019 年に Crown 社から刊行) は、文献研究とフィールドワークを統合して人口減少を予測した。2 人の著者は、学術論文や政府報告書から出生率減少が加速するという示唆を得た。さらに、市井の人々と会話をするだけでも多くの根拠を得た。2 人は、6 つの大陸を回って多くの都市を訪れた。ブリュッセル、ソウル、ナイロビ、サンパウロ、ムンバイ、北京、パームストリングス、キャンベラ、ウィーンなどである。彼らは、学者や公務員とも話したが、より重要なのは若い世代との会話だった。大学のキャンパスや研究所、スラム街で、若者たちから将来の重要な選択について考えを引き出そうとした。すなわち、自分の子どもを作るかどうか、作るとすればいつか、について聞いたのである。

出生率低下の 2 大要因

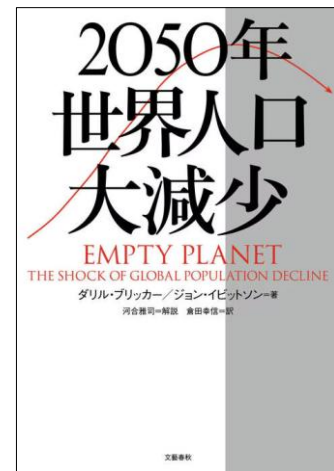
出生率はなぜ低下しているのか。*Empty Planet* の著者は、2 大要因として「都市化」と「女性の地位向上」を指摘する。都市化と女性の地位向上は、19 世紀から 20 世紀にかけて先進国に浸透していった。今日、これら 2 大要因は発展途上国でも同様に作用している。異なるのは、浸透のスピードが以前よりはるかに速いという点である。その結果、世界中で出生率が急速に低下しているのである。

(1) 都市化

Empty Planet は、出生率低下の最大要因が「都市化」であることに議論の余地はないとする。都市化とともに出生率が下がることを示す圧倒的多数のデータがある。では、その理由は何か？ 都市化が進むと、若い肉体労働力の必要性は減り、反対に子供は経済的負担となる。



原著(ペーパーバック版)



日本語訳

中世のヨーロッパに遡ると、90%の人々は農業で暮らしていた。農村では子供を作ることが「投資」となる。畑を耕す腕や牛の乳搾りをする手を増やすからだ。その後、産業革命が起こって工場が出現すると、都市が労働者を引き寄せた。しかし、都市では子供は「負債」となる。養わなければならない口が1つ増えるだけだ。

都市化は今日まで続いている（図2）。2007年には、人類史上初めて都市人口が農村人口を上回った。都市生活では子育て費用は高いと見込まれ、都市化は出生率を下げる。都市の住宅費は高く、都市では家庭内生産の面でも子供はあまり役に立たない。

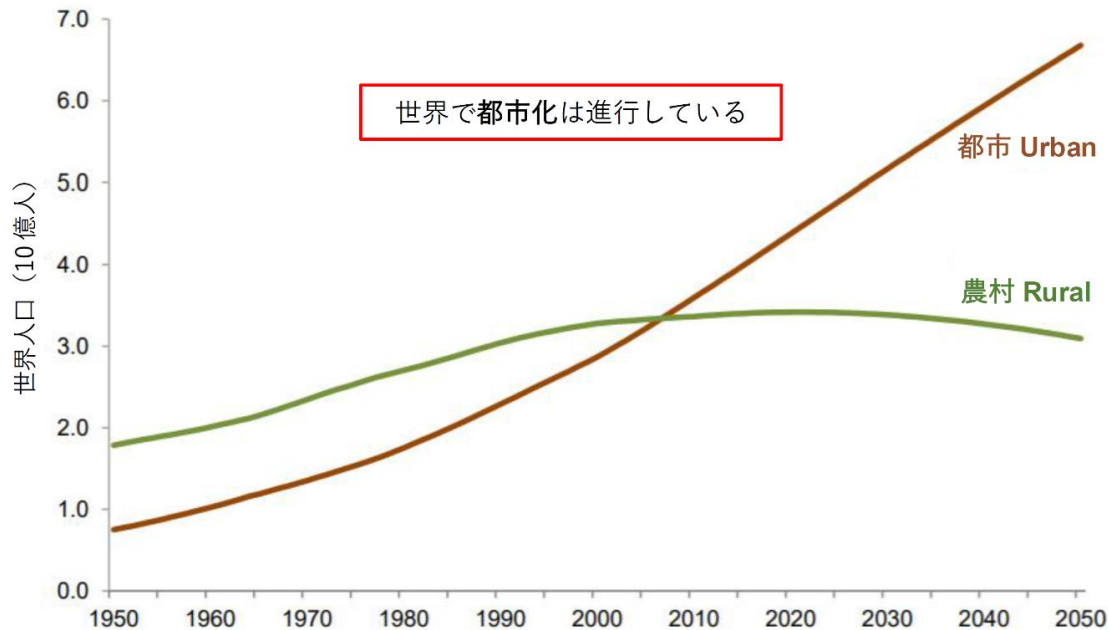


図2. 世界の都市人口と農村人口の推移

出所：United Nations "World Urbanization Prospects 2018"

(2) 女性の地位向上

出生率低下のもう1つの要因である「女性の地位向上」は、第1要因の「都市化」に係る。都市には学校や図書館、文化的施設がある。都市に移り住むことで、女性は知識を増やす。知識を増やした女性にとっては、自分が男性に従属するのは自然なことではなく、是正すべき誤りとなる。まず女性たちは、所有権や年金などの領域で法の下での平等を求めて活動した。続いて選挙権、さらには働く権利や男女平等賃金を要求した。こうして女性が多くの権利を獲得して地位を向上させると、女性はあまり多くの子供を産まなくなった。

一方、子供を産むことは女性にとって良いことばかりではない。19世紀には、とりわけ多くの子供を産む女性にとって、妊娠・出産は健康上の大きなリスクとなった。今日のように医療が発達しても、子供を養育することは負担となる。さらに、子供を抱えた女性は家の外での仕事も制限されやすい。外での仕事を続けられなければ、収入面だけでなく自立の可能性も危うくなる。子育ての負担を抑えて自立を求めようとすると、結果的に女性が産む子供の数は減っていく。

「この傾向は永続的？」「おそらく YES！」

かつて、人類は大飢饉や疫病で人口を減らすことがあった。今日、私たちは自ら選んで人口を減らそうとしている。この選択は今後も長く続くのか？ この問いに対して著者は、『その答えは、おそらくイエス』と言う。

いったん『低出生率のワナ』にはまると、少ない子供をもつことが常態化してしまう。カップルは、もはや子供をもつことを家族や神に対する義務とはみなさない。自分たちの個人的な満足感のために子育てをしようとする。その満足感は、一般的に1人や2人の子育てで満たされてしまう。

人口減少の副作用を恐れる人々の一部は、カップルがもつ子供の数を多くするような政策を提唱する。しかし、過去の事例は、そのような政策がほとんど成果をもたらさないことを示している。政府による手厚い子育て援助金のような支援策が、カップルが持とうとする子供の数を増やすことも時にはあった。しかし、一度下がった出生率を人口置換水準（人口維持のためには女性1人が平均して約2.1人の子供を産む必要がある）にまで高めることに成功した政府はない。しかも、こうした支援策は高コストで不況時には削減されやすい。さらに *Empty Planet* の著者は、カップルが本来は持たなかっただろう子供を、政府が無理に後押しして産ませることに倫理的問題もあるだろうと指摘する。

国連予測も速い人口減少を示唆

Empty Planet の予測を裏付けるように、国連の予測も速い人口減少を示唆する。まず、あらためて図2に示した都市化の推移を見ると、今後も世界的に都市化が進行する予測となっている。出生率低下の最大要因が「都市化」なのであるから、人口減少も進みやすいことになる。

また、最新の国連予測『世界人口予測2024』は、世界の人口減少が始まる時期を前倒した。従来の21世紀に入ってから人口が安定化するという予測（図1中の「中位推計」）から、2080年代に103億人程度でピークに達し、それから減少するというように修正したのである。